ふるさと再発見！ vol.7

ほうぼう わかやま

HOUBO WAKAYAMA

FREE

巻頭特集

和歌山軌道線
チンチン電車のある風景

- 紀州の歴史・文化 徳本上人 念仏に生きる
- 散策 友ケ島を歩く
- 施設紹介 文化財を身近に感じてみよう 和歌山県立博物館
- 団体紹介 東京から和歌山へエールを送る 紀友会
- シリーズ道の駅 一枚岩鹿鳴館

和歌山駅から、市電のターミナルとけやき通りを臨む。【昭和46年（1971）】

和歌山軌道線
チンチン電車のある風景

ガタガタ ゴトゴト チンチンチン。
和歌山にも響いていた、発車を告げる「チンチン」という鐘の音。
かつて全国の主要都市を走っていたチンチン電車。
いま、環境問題や交通渋滞対策で見直されているこの交通機関が、
和歌山でも市民の足となっていた。
ちょうど40年前に姿を消した和歌山軌道線（通称 市電）を振り返る。

激動の時代を市民の足として

和歌山の市内電車（以下 市電）は、明治42年（1909）1月に和歌山水力電気株式会社により、旧県庁前（現市役所前）―和歌浦間（4・65㎞）で営業が始まる。その後次々と路線を延ばし、最終的には和歌山市駅前―海南駅前（本線）、公園前―和歌山駅（新町線）、和歌浦口―新和歌浦（和歌浦線）と、全線複線あわせて16・1㎞にも及んだ。開業以来、経営主体が転々とし歴史的には紆余曲折の多い鉄道だったが、明治・大正・昭和という激動の時代を走りぬけ、市民の足として、また景勝地和歌浦への観光路線として親しまれてきた。

しかし、押し寄せる車社会の波と、黒潮国体開催に向けての道路整備とあいまって南海電鉄が廃線を決定。昭和46年（1971）3月31日に62年の歴史に幕を降ろした。

写真提供…和田康之 氏（「和歌山の汽車・電車 - 振り続けて半世紀 - 」著者 トンボ出版発行）
資料提供…溝端佳則 氏（和歌山県立文書館 主任）

【公園前交差点付近】1971 年
戦火をまぬがれ、長きにわたって活躍した 200 号車。
昭和 5 年製造。

京橋 手彩色絵はがき【明治末期の本町通り京橋付近】昭和初期になるまで京橋は木造であった。明治・大正時代の市堀川は美しく、京橋の下には貸ボート屋があり、赤提灯をつけた屋形船なども行き交っていた。

惜しまれた 市電の廃止

昭和46年（1971）3月31日の夜、最後の運行を終えた車両の周りに、多くの市民が駆けつけた。やがて、市民の間から「蛍の光」の合唱がはじまり、車庫前が歌声と拍手に包まれたそうだ。

元運転士の神野文夫さんに、市電が走っていた当時の様子を伺った。

市電は身近で心温まるもの

主な乗客は学生さんでしたね。沿線に洋裁学校があったので、女学生が多かったと思います。通勤客は少なかったですね。当時サラリーマンというと県庁・市役所に勤める人が大半で、市駅・東和歌山駅（現和歌山駅）からは徒歩が多く、海南・浜の宮方面からの人が利用していました。

とにかく、お客さんが乗務員を大事にしてくれたんです。親しくしてくれたし、ロマンスもありましたよ。

観光客というと、春先には紀三井寺や新和歌浦の高津子山への花見客で満員になりました。6月には、新和歌浦の店先で三宝柑をカゴに入れて売っていたので、皆こぞって買っていました。夏には和歌浦の花火大会や紀三井寺の千日詣りなど、人出の多い日には、動ける車両はすべて臨時運行させていましたね。

車内は真っ暗「花電車」

運賃は区間制で、市駅／和歌山駅から県庁前・高松・紀三井寺・浜の宮・海南の5区間に分かれていました。

商工祭の時は、古い車両を造花で飾りたてた「花電車」が走りました。車内の電気も点けず、誰も乗せずに運転手だけの運行でしたが、沿線の子供たちが喜んで、乗りたがりました。

車窓からの眺めで珍しかったのは、高松から和歌浦口までの軌道に沿って、松並木がずっと植えられていたことでしょうか。

また、海南の土地が低く、大潮のときに電車道が海水に浸かったことがありますよ。

余談になりますが、紀三井寺近くでは、競馬場へ連れて行く馬の横で市電の鐘が鳴ると、馬が驚いて立ち上がったりする。「馬がレースを走らなくなる」と競馬場関係者から苦情がきたこともありましたね。——悲喜こもごもの出来事は、40年経った今なお神野さんの記憶に鮮明に残る。

取材協力
神野文夫 氏
（元南海電気鉄道運転士）
昭和27～37年まで和歌山軌道線の運転士を務める。

【市役所前】1963年
毎年5月の商工祭に伴って運行された「花電車」。車両全体を装飾して街中を走り、人々のお祭り気分を盛りたてた。

乗客が車内で車掌から購入する切符。（提供…神野氏）

連接車（れんせつしゃ）【公園前】1968年
朝のラッシュ時の混雑解消のため、電鉄職員によって独自に設計された連接車。単車2両をくっつけたような車体は、数ある車両の中でも異彩を放つ希少な存在。

旧県庁前【現在の汀丁交差点付近】手前にある和歌山城の西堀の角が、軌道線開通のために埋め立てられカーブを描いている。県庁は、1938年に現在の場所に移転された。

ガタガタ ゴトゴト 市電が走る

Wakayama Tram

埋め立てられた北堀

公園前―市役所前間を通りすぎる時のお堀端の眺めは、和歌山城を背景に春夏秋冬を通じて美しい。この北堀は、明治44年（1911）に市電の複線化のために一部を埋め立て、昭和15年（1940）に道路拡幅のため再度埋め立てられた。舗装された並木道は、市内初の歩道もあり「市の誇り」とされたが、当初、約41mあった堀幅は約29mとなり、現在に至っている。

沿線は和歌山ラーメン発祥の地

戦後、市電沿線の拠点駅周辺には「屋台の中華そば屋」が数多く並ぶようになった。特に、繁華街でもあった「車庫前停留所」周辺には、競い合うように屋台が並び賑わっていた。市電が姿を消すと共に屋台の多くが市内各地に散らばり店舗を構えるようになった。それが今や全国に知られる「和歌山ラーメン」の起源となっている。

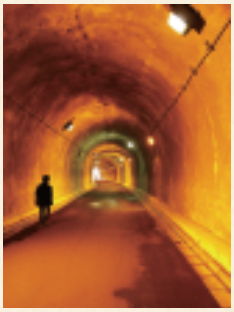
【和歌山市駅前付近】1952年
戦後復興期には、バラック小屋の店舗が立ち並び、やがて商店街へと変貌していった。

文豪作品に登場する和歌山市電

今からちょうど100年前の明治44（1911）年に、夏目漱石が講演のために和歌山を訪れている。その翌年に朝日新聞に連載された小説「行人（こうじん）」で、漱石は主人公に和歌浦や紀三井寺を旅させ、和歌山での体験を描写している。

> 夏目漱石の「行人（こうじん）」より
>
> 自分達は何だか市の外廓らしい淋（さむ）しい土塀つゞきの狭い町を曲つて、二三度停留所を通り越した後、高い石垣の下にある濠（ほり）を見た。濠の中には蓮が一面に青い葉を浮べてゐた。其青い葉の中に、点々と咲く紅の花が、落ち付かない自分達の眼をちらくさせた。
>
> （注釈）漱石自身が受けた当時の和歌山に対する印象として「和歌山市駅から本町通りに至る町並み」や「和歌山城の北堀」の様子が色濃く描かれている。

【浜ノ宮―琴ノ浦】1953年
紀三井寺から海南市琴の浦までの専用軌道約2.5kmが緑道（りょくどう）（遊歩道）として整備されている。複線が走っていたとは思えないような狭い道幅。



明治時代の面影がそのまま残るレンガ積みのトンネル。現在は内部にコンクリートが塗られ、照明も点けられている。

和歌山城内へと続く石畳。角がとれて丸みのある花崗岩（御影石）は、歴史を感じさせる。

転用された軌道の敷石

軌道の敷石は、現在でも様々な場所で再利用されているのをご存知だろうか。和歌山城では、大手御門から表坂へむけての約300mの石畳として転用されている。また、廃線と同年の夏にオープンした紀伊風土記の丘にも数多く転用された。他にも、一般住宅で庭の敷石になっていたり、変わったところでは地蔵の祠などにも使用されている。

【旭橋付近】1970年　和歌浦口方面から旭橋を臨んで、写真の奥に紀三井寺が見える。現在では、建物が邪魔をして同様には見られない。

廃線後も親しまれる名称

廃線後、ほぼ同じコース（かつほぼ同じ停留所）で代替運行をしているバスのルートにある「車庫前停留所」は、まさに市電の車庫の跡地だ。廃線40年となった今も名称だけが残っているのだ。また、JR和歌山駅前から海南方面までの、かつて市電の走っていた道を親しみを込めて「電車道」と呼ぶ方が読者の中にもいらっしゃるのではないだろうか。

和歌浦口付近の廃線間近（写真右）と現在の様子。同じルートを受け継いだ和歌山バスが、かつての電車道を走行している。1971年

第2の人生は魚の棲み家

現在、実際に見ることのできる市電の車両は、和歌山市と海南市にある2両のみ（岡公園の保存車両321号、民間に払い下げられ黒江にある322号）。同業他社に売却され、伊予鉄道で再起したのはわずかに1両だけだった。残りの53車両はすべて「漁礁」として白浜沖や有田沖に沈められ、今も海の底で魚の棲み家となっている。

1971年　岡公園にある321号（通称サニー号）の現役時代の雄姿。毎年こどもの日には内部公開され、実際に車両の中を見ることができる。

小松原通りから県庁前交差点方面を臨んで1965年（写真左）と現在（写真右）の様子。市電の走っていたところが、中央分離帯となっている。

徳本上人

とくほんしょうにん

念仏に生きる

厳しい修行で知られる江戸時代の念仏行者「徳本上人」（1758年～1818年）は、ただひたすらに念仏を唱え、人々の信仰を集めた。「徳本文字」と呼ばれる独特な文字の名号碑が全国に残るなど、多くの人々から慕われた上人の生涯を、誕生院住職の畠山澄男氏の絵解きを通して振り返ってみる。

幼馴染との死別から仏の道へ

徳本上人（本名は田伏三之丞）は、宝暦8年（1758年）日高町志賀の農家に生まれ、4歳のとき幼な友達の死に悲しむ上人の姿を見た母は「お念仏を唱えれば極楽浄土でまた会うことができます」と諭した。この言葉が終生上人の心に残り、念仏行者になるきっかけともなった。

27歳で出家し、財部村（現御坊市）の往生寺大円大徳和尚より「徳本」の名を頂く。

修行の激しさで知られる上人だが、最初の修行地の大滝川・月照寺（現日高川町）では、山を30日間歩き、お堂や洞窟で念仏を唱え続けた。他にも、水行はもちろん、念仏を唱えながら「五体投地」（頭、両手、両足を床につける礼拝）という修行を一日何万回も行って体中が血だらけになったり、穴が開くほど木魚を叩き続けたという逸話も残る。

一日の食事は麦の粉一合だけという粗食を生涯通し、眠るときも座ったままで、16歳ごろから、江戸小石川の一行院で亡くなる61歳まで、横になることはなかったという。

全国に残る徳本文字

徳本上人の名号碑には、上人の自筆の「南無阿弥陀仏」の文字が彫られている。

独学で学んだと言われる上人の文字には丸みがあり、また、終筆がはねていることから、縁起が良いとされ、「徳本文字」と呼ばれ人々から愛された。

名号碑はひっそりと道のそばに佇むものや、有名なお寺まで各地に広く分布している。

旅先などで、「徳本文字」の名号碑を探してみるのもおもしろい。

一心不動名号 誕生院/蔵

全国に千基以上残る名号碑

40歳を過ぎてから全国を行脚し始め、人々を苦しみから救うために、念仏を唱えた。

また、俳人の小林一茶とも信州を共に旅し、上人のことを詠んだ一茶の句が14句残っている。

徳本の腹を肥やせよ
蕎麦の花

上人の粗食ぶりを驚いて詠んだものだ。

徳本上人も、自作の道歌で説法し、何があろうと釈迦の教えを守るという信念が表れているのが次の句である。

極楽はあるかないかは
知れぬども
釈迦の教えを守る徳本

全国には上人の名号碑が数多く残る。人々の苦しみを念仏で救おうとする上人を慕い、その姿に感銘を受けた地域の人々が建てたものだ。その数は千基以上にのぼる。

県内では、誕生院や無量光寺（和歌山市）、道成寺（日高川町）など170基ほどある。県外では、信州や関東に数多くあり、長野の善光寺にも建てられている。

上人の行脚の軌跡は、地名にも残されている。信州上高地には「徳本峠」という峠があり、また志賀高原は上人の故郷「志賀」に似ていることからそう呼ばれるようになったという。

このように多くの人々の信仰を集め、徳川家からも帰依された上人は念仏修行を一生貫き、仏教の世界でも独自の道を生きた人だった。

ひっそりと佇む名号碑（加太）

徳本上人初行洞窟

大滝川森林公園の遊歩道を過ぎると、傍に「涼みの滝」がある。ほとばしる水しぶきが夏には暑さを和らげ、秋には紅葉がきれいな場所だ。

真妻山登山口の入口には、上人が出家した後、初めての念仏修行をした洞窟があり（本文参照）、今でも崇拝される方からの献花が添えられている。

耳をすませば「南無阿弥陀仏」と一心に唱える上人の念仏が聞こえてきそうだ。

涼みの滝

初行洞窟

誕生院

傍若無人な振る舞いにより隠居させられた第8代藩主徳川重倫公が、上人の悠然たる姿と法力に恐れ入り、改心して出家。実子第10代藩主徳川治宝公の命により、嘉永4年（1851年）、上人生誕の地に本堂が建立され、「誕生院」と称されるようになった。

上人の遺品・名号塔などの拝観のほか、住職による「徳本上人絵伝」という絵解き話も聞くことができる。激しい修行で生涯を念仏に捧げた上人の人となりにふれてみてはいかがだろう。

絵解きをする畠山氏

誕生院
【所在地】和歌山県日高郡日高町志賀2556
【TEL】0738-64-2174
【拝観】無休（事前にお問い合わせ下さい）
【料金】無料

友ケ島を歩く
ー自然と歴史にふれるー

友ケ島とは
瀬戸内海国立公園の一部である4島（沖ノ島・地ノ島・虎島・神島）を総称して「友ヶ島」と呼ぶ。東に紀伊半島、西に淡路島を望む紀淡海峡に位置し、友ヶ島灯台の西側広場には、日本標準時子午線の東経135度線が通っている。

要塞の島
明治時代より第2次世界大戦まで、軍事要塞として使用していたため、島の各所には砲台・軍事施設が良好な状態で遺されている。また、これらの砲台は、戦争終結まで使用されることはなかった。

豊かな自然
島は照葉樹林が茂り、様々な動植物の宝庫となっている。野生化しているためにあまり姿を見せなくなっているが、鹿（観光のため）や、孔雀（蛇・マムシ駆除のため）が島内に放たれた。

和歌山市内にありながら、今なお豊かな自然を擁する「友ヶ島」。
潮の香り、草の匂い、土の感触。
いつの間にか記憶から薄れていた子供のころの原風景がある。
島の各所には、戦前に使用されていた軍事施設・要塞等が
今なお残されており、『冒険心』をくすぐられる。
楽しかったあのころ・・・。記憶の中の日々に再会する。

アクセス
■南海電鉄和歌山市駅から加太線に乗り換え、加太駅下車。乗船場からの定期船で沖ノ島までの所要時間は約20分。運賃は往復で大人2000円、小人1000円。加太港駐車場の利用は500円（1日）。

■定期船時刻

（平常時 3/1～11/30） 9：00発／11：00発／13：00発／16：00発

（GW・夏季 4/28～5/6、7/20～8/31） 9：00発／10：00発／11：00発／13：00発／14：00発／15：00発／16：00発

（冬季時 12/1～2月末日※土日祝運航※ 12/29～1/3は運休）
10：00発／15：00発

※それぞれ出発時刻の30分後に友ヶ島発の帰りの便が出ています。
※火・水曜は運休。（4/28～5/6、7/20～8/17の期間を除く）
※気象状況等により欠航する場合もあります。

■問い合わせ先
友ヶ島案内センター　073-459-0314、友ヶ島汽船　073-459-1333

「郷愁」と「幻想」が織りなす不思議の島

加太港から「**ともがしま号**」に乗り20分ほどかけて島へと着岸する。桟橋を上がると「**友ヶ島案内センター**」の脇に置かれた戦時中の砲弾に目が行く。

まずは「**第5砲台跡**」を目指し西へ向かう。海の家を越えた先にある看板を目印に左へ。ちょっとした登山を思わせる坂を登り続けた先で砲台跡を目にする。レンガを覆う蔦が歴史を感じさせる。

ひとまず島の外周まで戻り、蛇ヶ池の先にある「**第2砲台跡**」へ進む。右手に池尻浜を眺めつつ、先程より大きな規模の遺構へとたどり着いた。その迫力に圧倒される。

ここからは、ややきつい勾配となる。曇り空の涼しい日にもかかわらず、流れ出る汗をぬぐいつつ、「**子午線広場**」の傍らに立つ「**友ヶ島灯台**」へ。高台に位置することもあり、風が心地よい。

灯台をあとに、南へと下る。「**孝助松海岸**」の先に「**旧海軍聴音所跡**」がある。木々の奥深くへと歩を進めるごとに、自然の息吹を実感した。

「**タカノス山展望台**」で昼食をとった後は「**第3砲台跡**」へと足を踏み入れた。時代を感じさせる、ある種荘厳なその空気は、つかのまの現実を忘れさせてくれるのに十分だ。

今回歩いたコースは、案内センターのパンフレットにある名所探訪コース（3.3㎞）に「**旧海軍聴音所跡**」を追加したもので、所要時間はおよそ3時間30分だった。

③第５砲台跡
明治 37 年竣工。12cm カノン砲が 6 門配備されていた。小さい規模ながら、当時の面影を残した弾薬庫を間近に見ることができる。

②友ヶ島案内センター
船の発着場となっている野奈浦桟橋前にあり、島の地図やパンフレットが入手できる。

①ともがしま号
加太とその4km 沖合にある友ヶ島とを結ぶ定期船。定員は 120 名。船の後方はオープンデッキとなっており、加太の潮風を体感できる。

④第２砲台跡
池尻浜の海岸沿いに配置された砲台群。レンガに絡まる蔦が歴史を感じさせる（内部への立ち入りは禁止）。

砲弾
第3、第4砲台に配備されていたという、8インチ砲（約 20.3cm）の要塞砲弾。桟橋前の広場に置かれている。

⑤友ヶ島灯台
リチャード・ヘンリー・ブラントンの手により、明治 5 年（1872 年）に建設された洋風建築の灯台。築 100 年以上の歴史をこえて、今もなお現役だ。

日本標準時子午線のとおる日本最南端の地

⑥子午線広場
灯台の西側に位置しており、日本標準時子午線の東経 135 度線が通っている。広場の真ん中には子午線標識が建てられている。

⑧旧海軍聴音所跡
比較的最近になって、この施設が潜水艦などの侵入を察知するために造られたということが判明・確認された。

⑦孝助松海岸
島の南西部に位置するこの海岸にはタイドプール（潮だまり）があり、小魚・貝などの観察が楽しめる。

⑨タカノス山展望台
標高 119.9m の一等三角点があり、広場では淡路島はもとより、四国・六甲・和泉葛城方面の山々をも望むことができる。

⑩第３砲台跡
他の砲台群と較べると規模も大きく、よく整備されていることから人気の場所となっている。映画のロケ地としても有名。地下施設は非常に暗いため、懐中電灯が必須。

文化財を身近に感じてみよう

和歌山県立博物館

和歌山県立博物館には「国宝・重要文化財」から
あなたの「思い出の品」まで展示されている

重要文化財の数は全国7位、国宝は6位

和歌山県の指定文化財の大半は宗教に関するもの。高野山・熊野三山、根来寺、紀三井寺などの中核寺院に残されてきたものが、重要文化財や国宝に指定されている。その数の全国順位は、重要文化財は7位、国宝は6位だ。同博物館では、そんな国宝・重要文化財の数多くを展示している。

多彩なイベント

同博物館は、1963年に創設された県立美術館が前身。1971年に和歌山城二の丸跡に設立された。その後、1994年7月に現在の場所に移転した。

黒川紀章氏が設計した同博物館は、隣接の和歌山県立近代美術館とともに、和歌山県内では唯一、公共建築百選に指定されている。

ハード面の美しさに加え、ソフト面でもさまざまな工夫がされている。テーマごとに、和歌山の魅力溢れる文化財を紹介する「企画展」が、年間7～8回開催されているほか、ほぼ毎週開催される学芸員の「ミュージアムトーク（展示解説）」では、歴史をより身近に感じることができる。

ミュージアムトークの模様

国内初の「触れる」展示

同博物館には、全国では唯一の取り組みとして、各方面より注目を集めている展示がある。「触れることのできる展示」だ。

一般的に博物館の展示といえば、ガラス越しに展示物を見るなど、『見る』ことを大前提で展示されている。しかし、それは視覚に障害のある方にとっては『バリア』そのもの。そこで、そのバリアを取り払おうということで、同博物館では昨年度から和歌山県立和歌山工業高校や和歌山盲学校の協力を得ながら、「ABS樹脂を使った触れる立体展示物」と「触図本」など、実際に手で触れることができる資料の作成を進めてきた。

展示の「ユニバーサルデザイン化」は、社会教育活動の場である博物館として、意義のある取り組みとして話題となっている。

受付前のフリースペースには、仮面の触図と仮面レプリカ、中津川行者堂の役行者及び前後鬼像レプリカが並べられている。

「わかやま節電アクションプラン」暑い夏の日は、家のエアコン・テレビ・照明などを切って、美術館や博物館で涼しく楽しく過ごしましょう！
8／2～8／31期間限定　入館料金割引　●高校生以下／無料　●65歳以上／無料　●大学生から65歳未満／半額

あなたの思い出も文化財に

マイミュージアムギャラリー ～あなたの思い出とともに～

和歌山城が見渡せる館内ロビーの一角に、小さなショーケースがある。それは、博物館の地域密着型の取り組みの１つ、一般の入館者のみなさんの思い出の品を展示する場所だ。

「高価なものでなくても、特別古いものでなくてもいいのですが、思い出が付随していることが条件です。博物館の展示物も１つ１つ固有の思い出がたくさん付随しています。利用者のみなさんが、それぞれの歴史を共有する場所として、博物館を身近に感じてもらいたい」と学芸員の大河内智之氏は熱く語られた。

展示をご希望の方は博物館まで
TEL：073-436-8670

写真は第 25 回展示「急行大和号のサボ―和歌山と東京を結ぶ寝台列車―」（8月6日まで展示）

●和歌山県立博物館

開館時間　午前9時30分～午後5時（入館は閉館の30分前まで）
常設展入館料
一般 280円（220円）、大学生 170円（140円）
※（）内は20人以上の団体料金。
※小学生・中学生・高校生・高齢者（65歳以上）・障害者は無料。
※和歌山県内の学校に通学する外国人留学生・就学生は無料。
※特別展の期間は別料金になります。
休館日　月曜日／年末年始／臨時休館日（展示替え期間など）
駐車場　有り。有料。県庁前交差点に進入路があります。

平成23年
7月23日（土）
▶9月4日（日）
企画展
和歌山城と城下町に住む人々

東京から和歌山へエールを送る 紀友会

東京にも和歌山ゆかりの人たちがいる。故郷とのつながりを大切にし、エールを送る有志の集まりが「紀友会」だ。和歌山を思う気持ちは、実際に和歌山に住む私たちよりも熱いかもしれない。

【紀友会】

紀友会とは、故郷を盛り上げようと、和歌山に縁のあるメンバーが 2004 年 12 月に東京で発足させた非営利団体。「紀州再発見」をテーマに講演や勉強会、交流会を通じて東京から和歌山を応援する活動をしている。現在会員数は約 140 人。

【復興支援企画】紀友会メンバーの輪で、和歌山県産品を被災地へ

東日本震災復興支援の取り組みとして、紀友会はフットサルチーム「ステラミーゴいわて花巻」の主将を務める同会員の後呂康人さんを通じ、被災地への支援を行なっている。

最近では、6月3日の第 21 回例会で「1口 500 円ワンコインチャリティ」を行なった。その収益金はＪＡ紀南と田辺市梅振興室の協力により、和歌山の特産物「南高梅」の梅干（200 gパック× 120 人分）となって、被災地へ届けられた。

【最近の活動内容】

● 2010 年

17 回「クロマグロ完全養殖の達成と将来展望」近畿大学水産研究所長　熊井英水氏

18 回「トルコ軍艦エルトゥールル号の遭難」串本町役場　堀口徳弘氏

「テヘランから日本人救出事件の裏話とトルコの親日」森永堯氏

19 回「和歌山再発見～食の楽園・癒しの聖地～」和歌山県広報課　日根かがり氏

「和歌山再発見」和歌山市長・すさみ町長・那賀振興局長

● 2011 年

20 回「和歌山から宇宙へ」和歌山大学観光学部教授　尾久土正己氏

「日本の有人宇宙活動の現在と未来」

JAXA 有人宇宙環境利用ミッション本部長　上野精一氏

21 回「紀州備長炭の魅力とそれを育てる若者たち」みなべ川森林組合参事 松本貢氏

「備長炭から見えてくる環境・健康・自然界」銀座掌マネージャー 倉田雅代氏

＜次回企画＞

「（仮称）和歌山発自然エネルギー利用への挑戦～日高川町の試み～」

日高川町まちみらい課　西晃史氏

【紀友会ご案内】

入会金：無料　　年会費：3,000 円

例　会：年３回（例会参加費：4,000 円（会員）～場所により異なります）2011 年は２月４日、６月３日、10 月７日

【事務局】

〒 103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町 15-3-201

有限会社 エー・アール・ネット内　紀友会

mail：jimukyoku@kiyukai.com

入会手続きは→ URL：http://kiyukai.com/membership

紀友会第18回例会より基調講演ダイジェスト

串本のエルトゥールル号事件に始まる 日本トルコ友好120年周年記念の講演会を開催

1890（明治23）年に、紀伊半島沖で座礁したトルコ軍艦エルトゥールル号（以下エ号）。その船員を、地元の串本住民が救出し、その後も献身的に看護して、無事に祖国へと69人を帰還させた。この エ号事件をきっかけに、現在も続いている日本とトルコの友好120周年を記念して、紀友会でも平成22年5月27日に講演会を開催した。

講師は、串本町環境衛生課長の堀口徳弘氏、元伊藤忠マネージメントコンサルティング社長の森永堯（たかし）氏のお2人。駐日トルコ共和国大使館参事官のブラク・アリ・カラジャン氏と通訳兼秘書の亀山（あきやま）昌弘氏も挨拶し、会場の新宿住友生命ビル47階の会議室には、会員など75人が集まった。

堀口氏は、エ号事件のときに、負傷したトルコ人に地元住民の中で初めて遭遇した高野友吉さんのひ孫にあたる。堀口氏からは事件当時の救出活動の様子を伺った。

また、森永氏からは、イラン・イラク戦争勃発時にイスタンブール駐在であった同氏が、トルコのオザル首相に直接申し入れて、トルコ航空機2機で日本人215人を無事イラクから脱出させたときの裏話を伺った。

日本政府が関与しないところで手配されたトルコ機の救出劇に、「我々は、95年前の恩返しをしただけだ」とトルコ政府は答えたそうだ。トルコ国民は皆、エ号事件を教科書で学び、それが「世界一の親日国」となっている理由の1つ。エ号事件当時の串本住民も、イラン・イラク戦争時のトルコ政府も、非常時に「見返りを求めない」「瞬時の判断」を下したわけだが、両国の人々の根底に流れる倫理観と友情を再確認した講演会だった。

和歌山県の道の駅を巡る

シリーズ 道の駅③

大迫力の巨大一枚岩

―一枚岩鹿鳴館―

古座川にある道の駅「一枚岩鹿鳴館」は国指定天然記念物「一枚岩」の最前面にある。一枚岩は約1500万年前の大規模な火山活動による自然形成物で、その圧倒的なスケールには、ただ息を飲むばかりだ。

一枚岩には『守り犬伝説』がある。その昔、岩を好物とする魔物から一枚岩を守ったと伝えられている守り犬が、4月19日と8月24日前後の日没前約5分間だけ大岸壁にその影を映すというものだ。壮大な自然の力が、古の人々の想像をかき立てたことに始まるのかもしれない。

一枚岩を見る以外にも、同館の中の喫茶コーナーでは平家の落人が伝えたと言われる郷土料理「うずみ膳」が頂けるほか、物産品コーナーには一番人気の「柚子たれ」をはじめ、秋に咲く地元の植物「キイジョウロホトトギス」の苗なども販売されている。

巨大一枚岩を見上げながら、大自然が発するパワーを吸収しに行かれてはいかがだろうか。

一番人気の柚子たれ

りりしい守り犬のイメージ図

地元産木材を使用した落ち着いた店内

一枚岩鹿鳴館

【所在地】和歌山県東牟婁郡古座川町相瀬290-2
【休館日】なし
【営業時間】観光物産センター 9:00～17:00
※トイレ・駐車場・公衆電話は24時間利用可能。
【お問い合わせ】TEL/FAX 0735-78-0244
【アクセス】阪和自動車道南紀田辺ICから国道42号経由 国道371号線を北へ約20分（大阪から3時間30分）JR紀勢本線古座駅から車で20分

編集後記

特集の「市電」の記事はいかがでしたか？ みなさんには実際に乗車された思い出がありますか？ 誌上でお話を伺った神野さんは、取材後にも「言い忘れたことがある…」とお電話を下さいました。市電への思いが伝わってきますね。

歴史・文化のページの徳本上人の生き方には、心を打たれるものがあります。今を生きる私たちも、上人のような立派な先人の後を継いでいきたいですね。

「友ケ島（P8）」「県立博物館（P10）」「一枚岩鹿鳴館（P12）」には行かれたことがありますか？ まだの方はぜひこの機会にご家族・お友達と一緒に訪れてみて下さい。楽しい休日になること間違いなしですよ。ちなみに、県立博物館の記事中の「蝕図本」は本誌を発行するウィングの製作です。

そして、最後になりましたが、クイズに応募して貴方のご感想をぜひお聞かせ下さい。読者の声こそが次号への励みです。よろしくお願い致します。

第７号編集長　岡　京子

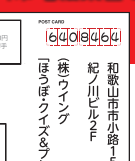
クイズとアンケートで当たる！

クイズにお答え頂いた方の中から抽選で「市電絵葉書セット5枚」を計20名様にプレゼント!!

写真提供 和田康之氏

ほうぼだけのオリジナル非売品！

ハガキ見本



① ご住所
② お名前
③ 年　齢
④ 性　別
⑤ クイズの答え
⑥ ほうぼVol.7の入手場所
⑦ 小誌のご意見・ご感想

問題 本誌に掲載しているチンチン電車の乗車券の運賃はいくらでしょうか？

ヒント 本号のどこかに答えが載っています。

① 30円　② 70円　③ 50円

Vol.6の答えは『②瑞芝焼』でした。

応募要項 官製ハガキ、又はメールにて ①ご住所 ②お名前 ③年齢 ④性別 ⑤クイズの答え ⑥ほうぼVol.7の入手場所 ⑦小誌のご意見・ご感想 を必ずご記入の上、下記へふるってご応募ください。

1次〆切：2011年9月末日（当選人数／10名様）2次〆切：2011年10月末日（当選人数／10名様）

■ハガキ ： 〒640-8464 和歌山市市小路153-1 紀ノ川ビル2F ㈱ウイング「ほうぼ・クイズ&プレゼント係」
■メール ： houbo@w-i-n-g.jp ※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

株式会社ウイング
印刷から、新しい価値の創造を。

株式会社ウイング／印刷物の企画・デザイン・製造を主体とし、出版サービスや印刷付帯サービス、さらにデジタルメディアなどの活用を視野に入れた「新しい印刷業」を目指している企業です。
［沿革］創業 1972 年。設立 1981 年。2005 年に中央印刷株式会社から株式会社ウイングに社名変更。本社、和歌山市梶取。従業員 53 名。

「ほうぼ・わかやま」発行について
和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で年２回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内活性化の両立を図ることを目的としています。

詳しくはウェブで検索→ http://w-i-n-g.jp　ウイング 和歌山

ほうぼのバックナンバーは弊社ホームページからダウンロードできます。
お問い合わせ先 0120-13-6700

ほうぼわかやま　第7号
2011年8月1日　発行人／松田好司　編集人／岡京子　発行／株式会社ウイング
本社　〒640-8411 和歌山県和歌山市梶取172　TEL.073-453-5700／FAX.073-453-5922
E-mail：mail@w-i-n-g.jp　http://w-i-n-g.jp